

職場紹介

Vol.24

特別養護 老人ホーム 芦花ホーム

今号の職場紹介は、当会・会員の
大里尚代さんが勤める「芦花ホーム」
です。今から17年ほど前に
石飛幸三先生が常勤医となったこと
で「看取り介護」を実践。介護
福祉士を中心に多職種連携による
サービス提供をいち早く行い、全
国的に注目を集める施設の一つと
なっています。



こちらが
大里さんです！



居住棟。中庭があります



吹き抜けになっている2Fは
近代的なつくり。左は日高
聡施設長

苦しみのない「平穏死」で ご利用者を看取る

京王線「芦花公園」が最寄り駅の「芦花ホーム」。定員103人の、ショートステイを併設する特養施設です。開設は1995年で、運営は世田谷区社会福祉事業団。当時の世田谷区長の「高齢者の最終章を完結できる施設を」との声によって誕生し、高齢者施設とは思えないモダンなつくりの外観が印象的です。建物内も入口付近は吹き抜けて自然光が入り、居住棟はこの頃主流だった回廊式の4人部屋ではなく個室を採用。ユニットケアの先駆けとなりました。

その「芦花ホーム」ですが、開設して10年後に変革期を迎えます。きっかけは、今では介護業界で多くの方がその名を知る石飛幸三先生が常勤医となったこと。それまでは終末期でも「食べる」ことが重要視され、必要以上のカロリー摂取が逆に誤嚥性肺炎を頻繁に引き起こす要因となっていました。その度に救急車を呼んで病院に送るという状態が続き、さらに口で食べられなくなったら「胃ろう」が当たり前。認知症のリスクも高めていました。

しかし、そこに一石を投じたのが石飛先生。無理に食

べさせることはしないで寿命を受け入れ、人生を全うする自然な死への考え方「平穏死」を提唱。それは利用者家族に広く受け入れられることとなり、今では大半の利用者がその経路をたどって、静かに人生を終えることを選択しているそうです。

大里さんは、「芦花ホーム」に勤務して今年で6年目。石飛先生が来た当時は、同じ事業団運営の上北沢ホームで働いていました。

「この頃、芦花ホームの看取りはすごいと聞いていました。異動でここにきて、それはまさに噂どおり。誰もが苦しまず穏やかに亡くなっており、それまで抱いていた介護に対する考え方が大きく変わりました。介護福祉士として死と直面するというのは精神的に厳しいことですが、子どもが生まれるときと同様、息が静かに止まる瞬間はすごく神秘的です。意識がまったくない状態が続いても、最後に顔いたたり一筋の涙が流れたり。その場面に立ち会えたとき、私がいる日を選んでくださってありがとうございますと、心からの感謝の念でお見送りをさせていただいています」



入口にある創設当時の
ジオラマ前で

医務室。右隣りに石飛先生の
デスクが



歯科衛生士の渡辺さんが常駐
する歯科医務室



コロナ禍で面会はこのような
仕切りで



レクリエーション活動



ご利用者に寄り添う介護職



職員間で打ち合わせ中



子育てとの両立もバッチリ
という大里さん

生活のすべてを見ている 「介護職」を輪の中心に

「看取り」介護の実践は利用者の家族に受け入れられただけでなく、ホームで働く職員の意識も変えました。それまで介護職は看護職の指示に従って動くのが当たり前で、残念ながら両者の関係性がいいとは言えない状況だったのは周知のとおりです。

「でも、看護の側もだんだんと多職種が手を携えサービス提供をすべきだという空気になっていって、看取り介護が行われるようになってからは石飛先生が『いつもご利用者を見ている介護職が中心となって動くべきだ』と。そう言うてくださったことで、私たちを取り巻く環境が劇的に変わったと思います。自分の仕事に自信が持てるようになり、大きなやりがいにつながっています」と、大里さん。

他の職種になかなか意見を言いづらかった過去がウソのように、「芦花ホーム」では誰もが考えや思いを発信することができます。石飛先生も「どんどん意見を言うように」と互いに遠慮のない関係を望み、職員たちの背中をプッシュ。介護職の周りには看護師、歯科衛生士、管理栄養士、機能訓練指導員、生活相談員がいますが、

密に連携を取りながら利用者一人ひとりを、チームを組んでサポートしています。

「ここでは口腔ケアにも力を入れており、介護福祉士も口腔機能維持のための知識が欠かせなくなっています。わからないことがあれば直接歯科衛生士さんに教わることができ、こうしていろいろな職種から知識を得て自分を高められるのがうれしいですね。そして、石飛先生が最後の砦としていてくださるので、私たちは安心感を持って仕事をすることができます。それが離職率の低さにも現れていると思います」

特養は病院にあらず。自宅で生活しているのと同じと考え、運営する事業団の理念「その人らしく」に則って、なるべくその人の好きなもの、喜ぶものに囲まれて過ごすことができるよう気を配っています。そのような環境を整えるためにも欠かせないのが職員同士の情報交換。施設内の空気はとても明るく、声を掛け合いながらお互いをリスペクトしたうえで仕事をしている様子がわかります。

歯科衛生士 渡辺三恵子さん

**終末期まで口腔機能を
しっかりチェック**

「芦花ホーム」には全国的にも珍しい、立派な歯科医務室が開設当時からあります。ご利用者の口腔衛生状態と口腔機能を定期的にチェックしながら、口から食べられるうちはそれが少しでも長く続くように。また口の機能が衰えてきても、口腔機能訓練によって回復するケースが多々あります。口腔乾燥症の改善のための口腔マッサージ方法など、それを毎日実践してくれるのが介護福祉士さん。その姿にはいつも頭が下がる思いです。私だけの目では気づかないことも日々の様子から教えてくれるのでとても助かっています。

また、ここでは終末期まで口腔内の状態をチェックし、ケアすることができますが、地域に成功例を発信することで在宅でも口腔ケアが重要であることを伝えたい。ご自宅でのよりよい方法についても、積極的に発信していけたらと思っています。

管理栄養士 齋藤雅子さん

**より家庭に近い環境で、
心の栄養を届ける**

特養は生活の場であるので、栄養管理という柱はあっても決められた食事でご利用者に我慢を強いるのではなく、より家庭料理に近く利用者の嗜好を反映した栄養管理を意識しています。その一口がいつ最期になるかわからないので、その方の好きなもの、食べたいものにできるだけノーと言わず、安全面や体調面に配慮しながら、どうすれば食べられるかをその都度関係職種みんなで検討しています。

さらに看取りの段階になると食べる量も種類も限られるので、栄養を摂ってもらうというよりは「心の栄養」を届ける。少しでも幸せだなと感じてもらえる食事、あたたかな気持ちになれるような時間を増やすことができたと思っています。こうした対応において大切になってくるのが、他職種からの情報です。とくに介護職の皆さんからの細かな気づきで、たくさんのきっかけをもらっています。

介護福祉士 大里尚代さん

**五感のすべてを使い、
人間力がものをいうのが介護職**

周りに他の専門職がいることで、そういう考え方もあるんだと勉強になります。介護職は幅広い知識が求められますが、わからないことはすぐに聞ける。知識が増える度にプロとしての自信が湧いてきます。介護という仕事は一見誰にでもできそうと思われがちですが、本当に奥が深い。遠くで聞こえる咳払いを敏感に聞き取り、便や嘔吐物の匂いをかぎ分け、五感のすべてを使って仕事をします。そして、コミュニケーション能力も大事で、それによって自分の成長や楽しみ方が変わってきます。人間力がものをいう、すごい仕事なんですよ！

専門職が
力を合わせます

左から管理栄養士・齋藤さん、大里さん、機能訓練士・黒野さん(デイホーム夏祭り参加の服装です！)、歯科衛生士・渡辺さん、サービス係長の那須康樹さん

機能訓練指導員 (PT) 黒野大希さん

**食するときの姿勢など、
心地よく過ごせるようにサポート**

リハビリというと、日常生活動作能力の向上のため病院や在宅で、がんばって体を動かすというイメージですが、特養は終の生活の場です。身体状況、精神的な気持ちの部分など、段階に合わせて心地よく、穏やかに過ごすための生活様式を提案するのが私の仕事です。

ベッド上のポジショニングや介助方法の検討が中心ですが、現在はコロナ禍でクラブ活動等の離床の機会が少なくなり、ご利用者が一堂に会して楽しい時間を過ごせる食事の場面などにご利用者と関わる場面が増えています。どんな姿勢なら楽に食事がとれるのか、一人ひとりにフォーカスし、その時間を少しでもよくするために多職種の方々と会議や日頃の雑談を通して情報交換しています。PTとしてこれほど密に連携するというのはこの職場が初めてです。そして、この職場で最も重要な連携の相手であり、主役となるのは介護職の皆さんです。私たちのもつ知識や技術を大いに利用してもらい、ベストな介護サービス提供につなげてほしい。それが施設全体のサービス向上につながっていると思っています。



石飛幸三（いしとび・こうぞう）先生。1935年の広島生まれ



お正月のイベント



お正月の職員による催し

芦花ホーム

東京都世田谷区粕谷

2-23-1

☎ 03 (5317) 1094



アイビールックでオシャレな先生。ボルシェが愛車で「名車ゆえに部品もなくなり、それをどうやって楽しく維持していくか。人の体と車の文化は共通するものがあるね（笑）」



中庭で避難訓練



ご利用者と大里さん

御年 85 歳、石飛先生インタビュー 利用者家族、介護職が自分のあり方を変えた

医療と介護の縦割りという関係を「連携」というかたちに変えていった「芦花ホーム」。石飛先生は元済生会中央病院の副院長で、血管外科医として複雑な手術をこなし、多くの命を救ってきました。そして同病院を退職後、それまでの実績を少しでも生かせればと思い「芦花ホーム」の常勤医に。しかし、ここで高齢者に真摯に向き合う介護福祉士の姿を見て、それまでの医療に対する考え方や人生観までが変わっていったそうです。べらんめい調！で誰にでも楽しそうに話しかける姿が印象深く、気さくな人柄が職員の士気をも高めます。

「病院時代は90歳の人でも血管を20代に戻し、偉そうに論文なんか書いたりしていたんだよ。でも考えてみたら、他の内臓など部品の多くは故障だらけ。にもかかわらず悪いところがあれば治すのが医療、命あってのことだと信じ、家族はいるのか、仕事はどうするのかなどその人の治療後の生活なんてまったく頭になかった。そんな考えを変えたのが、このホームで出会った人たちです。利用者の家族で認知症の奥さんを長く自宅介護してきたご主人が、胃ろうを拒否して『認知症なのにがんばらせるのが愛情か』と。ハッとしたねえ。よく考えたら万物流転。不必要な医療の介入がかえって本人を苦しめることに気づき、自然に任せて静かに見送る『平穏死』という考え方に至ったわけです。

加えて、高齢者を献身的にサポートする介護福祉士さんたちの姿には大いに感銘を受けました。なんて優しい心で接しているのかと。そして、病院ではみんな遠慮し

て私にものを言わなかったのに、本音で言葉をかけてくる職員にここで出会ってまたびっくり。それまで偉そうにしていた自分が恥ずかしくなり、こういう人たちがいる場所なら今後意味のある生き方ができるなど。今年で18年目に入ったけれど、そんな介護士さんから毎日勉強させてもらっています。人としてやっとまともになってきたよ（笑）」

利用者をずっと見続けている常勤の配置医だからこそ適切な判断を下すことができ、自然と「平穏死」へ導くことができます。ただ石飛先生によると、全国に特養が1万カ所あるにもかかわらず、常勤医を置いているところは1%にも満たないとのこと。

「介護保険から加算がつくのになんてしてか。そこには医者の意識などさまざまな理由があると思うが、医療には2つの役割があり、ケガや病気から救うための医療のほかに、最期まで楽しく生きることを支えるための医療がある。このことを広く発信し、少しでも常勤医の改善につながるようにしていきたい」

「平穏死」を推奨しながらも、現実には人それぞれ異なる環境を持ち、一筋縄ではいかないことが多いと改めて感じているという石飛先生。でもいつのときも利用者、家族の思いを汲み取り「自分にできることは何か」を模索し続けています。そんな姿は、今日も周りの職員の大きな励みになっています。

※『平穏死のすすめ』（講談社文庫／2010年）、ほか石飛先生の著書多数。